

## 審査の結果の要旨

氏名 古市大輔

現在の遼寧・吉林・黒龍江三省の領域を「中国東北」という一つの「地域」と見なす観念は、どのような歴史的過程を経て形成されたのか。本論文は、このような問題関心から、清代後期（18～19世紀）の盛京（奉天）における米穀流通と官僚制の変化を詳細に検討し、「東北地域」という観念の形成過程を明らかにしようとしている。

第一部では、清朝による採買・倉儲（官による穀物の買い上げと備蓄）制度の変遷を扱い、18世紀の穀物採買制度を機として奉天―内地間の商業的穀物流通が促進されたこと、その後19世紀に、財政的見地から北京への穀物輸送を命ずる清朝中央の要求に対して奉天官僚が抵抗するなかから食糧政策における奉天行政の「自主性」が形成されていったこと、を論ずる。第二部では、同時期の盛京における官僚制の変化を、制度上の機構改革のみでなく具体的な官僚の昇進パターンの検討を通じて考察し、清朝中期にはいずれも北京中央官僚の昇進コースに組み込まれていた盛京の複雑な官制が、19世紀後半の土匪討伐・財政再建の課題のなかで改革され、盛京将軍への権力集中、地方官の経験をもつ実務派官僚の登用、という形で北京の影響からの脱却が図られること、を解明している。作者によれば、この時期の奉天（盛京）が北京との経済上・行政上の特殊な強い結びつきから脱却してゆこうとする過程は、内地他省と同等化する「内地化」の過程であるとともに、中央の支配から自立する「分権化」の過程でもあった、という。

本論文は、大量の公文書の分析に基づいて多くの新事実を実証的に解明した労作であり、特に、従来の研究の空白部分であった19世紀の奉天の支配体制の変化を跡づけた意義は大きい。問題関心の大きさに比して史料的な限界から推測に止まる部分も見られ、特に東北内の奉天以外の地域や官僚層以外の動向、さらに中国全般の変化との関係については十分に論じられているとはいえない。しかし、それらは今後の更なる考察の課題となすべきものであり、博士（文学）論文として十分な水準に達したものと認めることができる。